BAIEIDO-TSUSHIN

梅栄堂通信

Vol.62

'15 春号

創業三百有余年
梅栄堂
〒590-0943 堺市堺区車之町東1丁1番4号
TEL 072(229)4545(代) FAX 072(227)1672
ホームページURL http://www.baieido.co.jp

社長雑感

ものごとには、出口が大事…

梅栄堂社長　中田信浩

また新しい年がやってまいりました。毎年、新年のご挨拶をさせてもらうにあたり、なにかフレッシュで、お役に立てる話題を提供したいとは思っておりますが、いつも新しいお話をお届けするのは、なかなか難しいものですね。梅栄堂といたしましては、昨年は、かねてから考えておりました〈高品質の香立てセット〉の発売がやっと実現したのが、とても嬉しいことでした。昨年もご紹介しましたが、世界的工業デザイナーのケン奥山氏との出会いがあり、氏のKEN OKUYAMA DESIGNによる〈南部鉄器香立て〉と〈伽羅お香〉のセットで、三五六個限定販売の『KYARA』と、〈有田焼香立て〉と〈沈香お香〉のセット『NAMI』の二点ですが、発売と同時に、おかげでたいへんな話題を呼び、マスコミをはじめ、いろいろな新聞、雑誌でも取り上げていただきました。

高額商品にもかかわらず、いままでとは違った新しい顧客層も含め、ご好評をいただいております。

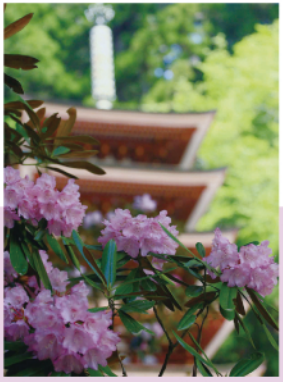
ケン奥山氏からは直接いろいろな印象深い言葉を聞かせていただきました。その中のひとつに「ものを創ることは大切だけれども、出口をつくることも大事！」ということをお話されていたのを今でもよく思い出します。この出口とは、私どもにとっては、消費者の皆様に買っていただくこと。すなわち販売力にかかっているということを痛感しております。せっかく良いものができたのですから使っていただいてこそ、価値も伝わるものですね。これからの努力の必要性を強く感じる今日この頃です。

この『KYARA』と『NAMI』の二点は、恒例になりました展示会〈NY NOW 2014 summer〉にも出展し、人気をいただきました。また、昨年の東京ギフトショーには〈伝統とModernの日本ブランド〉のエリアに出展、ご好評をいただきました。高品質の商品をお届けするため、より良い「出口」を見つける努力を続けてまいりますので、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

▲展示会／NY NOW 2014 summer

www.kenokuyamadesign.com/

雑感スケッチ



四季彩々

室生寺
深山の境内を彩る三千本のシャクナゲ

真言宗室生寺派大本山である室生寺は、奈良県と三重県の県境にあります。室生川の清流に架けられた太鼓橋と呼ばれる朱塗りの橋をわたると、そこはもう室生寺の境内です。

奥深い山と渓谷に囲まれた室生の地は古来神々が住む聖地と仰がれていましたが、奈良時代、この地にて桓武天皇の病気回復祈願が行われ、それが叶ったことから、当時の高名な学僧であった修円らの尽力で室生寺が創建されました。室生寺は、女人を禁制した高野山に対し、女性の参詣を許したことから『女人高野』と呼ばれ親しまれています。

室生寺は、また『シャクナゲの寺』としても有名で、毎年四月も中頃を過ぎると、境内のあちこちで、シャクナゲの花が、紅色のつぼみを開き始めます。花の色はしだいに薄桃色に変わり、やがて満開を迎えます。

室生寺は山岳寺院のため、どこに行くにも特有の石畳の坂『鎧坂（よろいざか）』を登ります。まず仁王門をくぐり、坂を上がりきると『金堂』、ついで『本堂』、さらに登ると高さ十六メートル、日本最小の『五重塔』へと続きます。これらは国宝に指定され、他にも建物内部には本尊の『釈迦如来立像』をはじめ、国宝、重要文化財に指定された数多くの仏像が安置されています。室生寺の境内で、シャクナゲが満開を迎えるのは、ちょうどゴールデンウィークの頃。この急な坂道の両側には、これらの歴史的な建造物を背景に、約三千本のシャクナゲが清々しくも、豪華な花をいっぱいつけて、急な坂道を登る参詣者の疲れを癒してくれます。この時期には例年多くの観光客が訪れるため、静かな境内を味わいたければ出来ればなるべく午前中の早い時間がお勧めです。

開花時期　4月下旬～5月上旬
拝観時間　8時30分～17時
拝観料　大人500円
アクセス　近鉄室生口大野駅から室生寺前行きバス終点下車徒歩5分
問い合わせ　0745-93-2003

香り考察

米田　該典（大阪大学大学院医学系研究科）

香炉巡りは楽しい

それぞれが意味を持つ「焚香炉」と「燻香炉」

古代から近世まで、医薬学の先賢に縁があると考えられる史跡を巡り、遺徳を偲ぶ旅を続けて数年が経つ。その場の多くは寺院であるが、ほとんどの寺では長い歴史の中で改修等があって、縁の事蹟が逸失していることが多い。そんな時でも本堂前に据えられた香炉は大きく、否が応でも目に付く。そんなことから、いつの間にか、この旅の目的は結果的には香炉巡りになってきている。

ところで、寺院等で普通に見る香炉となると、本堂の内外にある大きな香炉と共に、寺内には柄香炉などの小さい香炉も少なくない。

そんな香炉も、我々の周りの香炉とは、やや趣が違う。

焚香用か、燻香用かの違いなのだろう。焚香炉は炉材に金属類が使用され、耐熱性を重んじるのが普通である。その為、本堂前の香炉は容量が大きく、時には幾つもならび、その形や大きさが同じであるとは限らない。製造や設置時期が異なるからなのだろうか。多くの炉には由来や因縁が、そして寺院の縁起などが炉を取り巻くように書いてある。

その例は古代の炉に見られ、近世のある時期までは普通のことであったようだ。しかし身近な香炉には図柄はあっても、記文はない。

そんなことで、「燻香炉」は美術品として扱われるが、「焚香炉」は実用品としての評価になるのかもしれない。でも、大香炉が語ることは多い。

そんな記文との出会いを求めて、私は各地を旅している。

このような香炉にて焚香するときは、われわれは香には敬意を込めて「お香」と呼ぶ。でも、最近では「お香」と言っても、不幸なことに趣旨違いに使われることがしばしばある。

危険ドラッグなどの件で摘発されたとき、「それはお香ですから…」と言い訳することが多いようだ。

こんな使い方をされるとは香の関係者には、まったくもって困った事である。

▲寺院でよく見る香炉

▼寺院境内の香炉（四天王寺）

「お香」の解釈とは…

最近、新聞紙面やテレビ、ラジオなどのニュースで、「お香」や「ハーブ」などといった言葉が登場しない日は無いかもしれない。

いささかなりとも「香」に関与してきた私としては嬉しい…。と言いたいのだが、これらの言葉の使われ方を考えるとき、それがどうやらそうばかりではないらしい。

「お香」というとき、私たちは香や香材に対して若干にしろ、畏敬の念を抱いている。ところが最近では違法行為の言い訳に「お香ですから…」と使用する。それは脱法ハーブとか合法ハーブ、さらには危険ドラッグ等と言われる不正薬物を扱い、官憲に取り締まられたとき、言い逃れに常用するのが「これはハーブの一種で、『お香』として…」と言うのだから、始末におえない。香に関係してきた者としては、「ハーブ、お香とはそういうものではないですよ！」と言ったところで「それは皆様だけの解釈でしょう…」と、ばっさり切り捨てられる。「お香」は、特定の事物の指示語ではない。

お香と称して危険薬物を使う方法は、燻煙を嗅ぐようで、私たちが行う燻香法と変わりはない。でもその目的は全く違う。お香は香りを楽しむことだから、やっと感じる程度のかすかな香りにも神経をとがらせている。しかし、違法にハーブを使う人達は、一時（度）に大量の香を燻すべ、短時間に酩酊状態になることが狙いのようである。となると、ますます「お香」には関係無いことなのだがなあ…、ほんとうに困ったことだ。

Profile
米田　該典
よねだ　かいすけ
Kaisuke Yoneda

所属：大阪大学大学院医学系研究科医学史料室
薬学博士　神戸市生
専攻：文化財の材質調査と保存の科学
薬用資源学　薬史学

薬学時代には正倉院薬物を調査し、博物館へ移籍後は文化財全般に枠を広げ、いつの間にか海外の文化財にまで手を広げつつある。

桜 サクラ

日本人に愛され、日本を代表する花

一月の沖縄にはじまり、やがて北上し、五月の初旬ごろ北海道で終わるサクラの前線。いつ咲き始めるか？満開はいつごろ？といった話題は、日本の春には欠かせないもの。それだけサクラは日本人にとって、親しみのある日本を代表する花といえるでしょう。

サクラは古くから日本に野生種として存在していましたが、これほど日本の花として認められるようになったのは平安時代も末期になってから。奈良時代には花といえば梅の花を指し、万葉集にもたくさん詠まれています。しかし平安時代になると、今まで野生でしか見られなかったサクラが都に移され人々が鑑賞できるようになり、このころから『花見はサクラ』と考えられるようになりました。また、お花見というのは日本独特のものらしく、桃山時代に豊臣秀吉が京都で催した『醍醐の花見』は歴史的にも有名ですね。

サクラの品種は現在では四百種を越すと考えられていますが、大きくは山野に自生する〈ヤマザクラ〉に代表される野生種と、鑑賞を目的にした〈ソメイヨシノ〉に代表される園芸品種に分けられます。現在はこのようにサクラといえばソメイヨシノと考えられますが、江戸時代に江戸の染井村で栽培されたのが始まり。花が密集して咲き、華やかさが人気を呼び、その後日本中に広がりました。

日本人に愛されるサクラですが、いずれも花の香りは弱く、ベンズアルデヒドという甘いアーモンドの花に似た少量の成分が含まれています。それとは別に桜で思い出す香りといえば可憐な春のお菓子『桜餅』のサクラの葉に含まれる爽やかな香りの成分はクマリンという香気だそうです。

〈今号の表紙／乙女椿（おとめつばき）〉

●話題

不変と革新

日刊工業新聞では、シリーズ『貫く企業理念』の中でチャレンジを続ける企業として、梅栄堂が取り上げられました。沈香や伽羅などの希少原料の高騰のなかでも、同社は天然原料にこだわり、高級線香を作り続けてきたこと。

また、一方ではもう一つの消費者ターゲットの開発を試み、コーヒーや緑茶の香りがするアロマ系の製品を開発。新しい販売ルートの開拓にも実績をあげ、さらには海外受注も踏まえて、ニューヨークのギフトショーにも出展するなど、十六代続く伝統を守りながらも、チャレンジを続ける企業として紹介されました。

〈KYARA〉〈NAMI〉

KEN OKUYAMA DESIGNとのコラボレーションで実現し、伽羅と沈香との組合せで発売した〈KYARA〉〈NAMI〉が発売直後から大変な反響を呼んでいます。今までにない香立てと高級線香との組合せがめずらしかったことに加えて、その斬新なデザインが新聞各紙だけでなく新しい分野の雑誌等でも掲載、話題を提供しました。主なものとして、朝日、読売、産経、日経他、全国多数の新聞、モノ・マガジン、CAR GRAPHIC、カー・マガジン、美プレミアム、週刊朝日、ロッソ、他多数。ご好評頂き有り難く思います。

テレビ放映

フジテレビの人気番組「有吉くんの正直さんぽ」は、地元でのふれあいを楽しむ人気番組ですが、小岩編では風情の残る町並みを散歩。商店街のお線香屋さんにも立ち寄り、数ある線香の中から有吉くんが、珍しいコーヒーの香りの線香〈残香飛〉を発見。そこで有吉君は線香の香りについて、いつもながらの歯に衣を着せない正直トークを展開。周りの雰囲気を盛り上げました。

●商品紹介

日本的モダニズムの結晶「KYARA」

梅栄堂創業三五六年を記念して発売された「KYARA」は、フェラーリのデザイン等で世界的に有名な、KEN OKUYAMA DESIGNと梅栄堂の伽羅お香のコラボレーションでうまれた、超高級線香と香立てのセットです。折り紙をイメージし、立体的に構成したモダンなデザインの香立ては、南部鉄の重量感とあいまって、すばらしい空間を演出してくれます。伽羅の深遠な香りの世界だけでなく、香時計としても楽しめる優雅なデザインです。大切な方へのプレゼントとしても、お勧めいたします。

●KYARA
伽羅お香と香立てセット
50,000円（税別）